

# 共立女子大学文芸学部報

富永真樹先生  
(言語・文学領域)  
インタビュー

聞き手 福嶋伸洋

## 学生の印象

——着任されて半年ですが、その前にもこちらで非常勤講師として授業を持たれてたんですね？

富永 先生(以下敬称略) そうですね、短大と大学で合わせて4年ぐらい、非常勤でお世話になってました。

——共立の印象はいかがですか？

富永 本当にみなさんもすごく素直で伸び伸びしていて、授業もしやすいですし、気持ちがいいなと思います。いろいろとお話をしたり授業を進めたりしています。

——授業見学会のときにちょっとお授業を覗いたんですけど、大人数でした。

富永 そうですね、ちょうど現代文学を中心にやっている授業だっ



たので、近代文学なんかよりかは  
おそらく聞きやすく、みなさん来て  
くれます。授業で毎回感想を書  
いてもらうんですけど、それもす  
ごく熱心にいろいろ考えて書いて  
くれるので、毎回楽しく私自身  
やってみました。

——現代の、同時代の作家さんの  
作品を取り上げているという印象  
があって、そういうのもきちんと  
フォローされているんですか？

富永 そうですね。近代文学だと  
やはり学生からするとちょっと遠  
い、私たちがからすると近代です  
ごく近く感じるんですけど、学生  
からするともう明治なんて本当に  
昔の話です。

でもやっぱり近代で持たれてい  
る問題意識がずっと現代まで続  
いているので、現代をやってそこ  
から近代文学も考えてもらったり  
あるいはまた近代から現代に戻  
ってきたりということができたらい  
いなと思って。

今やっている授業も女性作家に  
限っているんですけど、近代も現  
代も女性作家であったり、広く女  
性たちが持っている問題意識で  
よく通じているところがあるので  
そういう形で授業をしています。

——作品は宿題として読んでも  
らっているんですか？

富永 いちおう前もってお配りを  
して、読んできてねっていう風に  
は言ってるんですけど、読んでな  
くてもわかるように解説します。  
そこで興味を持ってくれた子が後  
から読むっていうことをしている  
かなっていう感じがあるので。

授業内で扱えない作品をとかに  
く数打つ感じで紹介をして、何か  
引っかかってくれるといいなと  
思っています。

## 授業について

——扱うのは長篇が多いですか？

富永 やはり長篇だと読みづら  
いかなと思うので、できるだけ短  
篇で読みやすいものを選んで授  
業をするようにしています。

現代の作家だと多少長くても読  
んでもらえたりするんですけど、  
近代になるともう途端に読みた  
くなくなってしまうので。まあ気  
持ちは分かるんですけど。

長篇は紹介に留めておいて、夏  
休み中なんか読んでくれる子が  
いたりするので、こんな話がある  
んだよっていう紹介はするように  
はしています。

——現代の作家の方が反応はいい  
ですか？

富永 ずっといいですね。やはり  
読みやすいですし、現代の作家  
って現代の問題を書くので、す  
ごく身近な社会問題、自分たちも  
ちよっともやもやしてたり、気  
になることなんかを書くという  
ので、引くか、興味を持ってく  
れる学生が多いなっていう気が  
します。

最近やって反応がよかったの  
は、村田沙耶香さんの作品は  
やっぱり、現代の社会の構造で、  
労働の問題であったり、ある  
いは家族の問題であったり。

——『コンビニ人間』ですか？

富永 『コンビニ人間』は紹介  
だとして、取り上げたのが『消  
滅世界』。けっこう激しい、好  
き嫌いが分かれるだろうな  
という形のお話。ディストピア  
もので、出産とか恋愛とかの  
在り方を問い直していく作品  
なので、それは嫌いな子、苦  
手な子は多いだろうなと思  
ったんですけど、けっこう興  
味を持ってもらって、そこ  
から村田



沙耶香さんの本を読んだって  
話があったりしました。

あとは川上未映子さんの女性  
の身体の話とかは、引き付け  
られるかなっていう印象を受  
けました。

——ご専門は泉鏡花ですね？

富永 そうなんです。幻想文学  
の中でも泉鏡花に興味を持  
ってやっています。本当は授  
業でもやりたいんですけど、  
なんせ近代文学の中でも非  
常に読みづらい作品を書く  
作家なので、どうしようか  
と思うんですが、たまたま  
書いてることはすごく面白  
いです。以前、変身という  
テーマで、動物から人間  
になったり、人間が神様  
になったりとか、そういう  
作品をいろいろと取り上  
げてみて、それも面白  
かったです。そんな風  
にジャンルを絞って、鏡  
花の作品を紹介してい  
けたらいいかなと思  
っています。

——趣味について伺ってもいい  
ですか？

富永 私、絵、美術が好きなん  
です。なので、美術館に行  
ったりするのがすごく好き  
です。研究のことに  
関わってくるんで

すけど、昔、文学をやる  
うか美術をやろうか迷  
って、どちらかを取  
ったらどちらかを捨  
てなきゃいけない  
んだと思って、す  
ごく悩んで文学を  
専門にしようと思  
ったんですけど、  
進めていくうちに、  
いま文学と絵画とか  
挿し絵とか装丁とか、  
そういう話も研究  
しているの、両方  
できちゃったって  
いう。なので、  
趣味の部分もち  
よっと、どちら  
もできたな  
っていう感じが  
します。



共立女子大学文芸学部報  
第148号  
発行日 2026年1月19日  
編集・発行 共立女子大学  
文芸学部  
〒101-8437  
東京都千代田区  
一ツ橋2-2-1  
発行責任者 阿部由香子  
創刊 1968年12月  
題字 遠藤慎吾  
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご  
感想を以下のメールアドレス  
までお寄せください。  
gakubuho  
@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公  
式HPの「文芸学部」の  
コーナーで  
もお読み  
に  
なれます。



## 第148号 主目次

- 第1面 富永真樹先生  
インタビュー  
VR歌垣ゲーム  
制作中
- 第2面 Stories
- 第3面 俳壇・歌壇  
Geminiさんに聞く  
講評
- 第4面 領域から  
心象点描

## VR 歌垣ゲーム制作中 遠藤耕太郎

ねといった感じで「許してあげ  
ない」と歌う。音声があればよく  
伝わるのだが、そう言いながら、  
もう許してるといったニュアンス  
で歌うのである。歌い手も観客も、  
その歌い方を見て歌の駆け引きの  
楽しさを味わっていたのだろう。

『万葉集』の多くの恋歌も非日  
常の空間で男女が虚構の恋愛関係  
を作って、駆け引きを楽しんで  
いる。万葉恋歌の  
前身には、「歌垣」  
という行事があっ  
た。歌垣には男が  
「あなたの名前は  
なんというの？」  
と女に聞く歌があ  
る。女はいろんな  
答え方をするのだ  
が、『万葉集』には、  
やんわりと拒絶す  
る歌もあれば、か  
なり大げさに断る  
歌もある。



人妻に言ふは  
誰が言さ衣の  
この紐解けと言  
ふは誰が言(巻  
十二・二八六)



この歌は「私に  
はもう夫がいるの  
よ。私の下着の紐  
を解けたなんてず  
うずうしいわね。  
だいたいあんた誰  
なの」という意味。  
もうコテンパンで  
ある。もちろん夫  
がいるというの  
は虚構で、実際  
には恋愛の駆け  
引きを楽しんで  
いるだけだ。こ  
の人の  
こういう行事は  
今も中国の奥地  
(長江上流)や東  
南アジアの山岳  
地帯には残って  
いる。集まるの  
は未婚の男女  
だけではない。お  
じいさんもおば  
さんもいて、み  
んなが

虚構の恋愛関係を作った歌の掛け  
合いを楽しんでいる。歌垣文化は、  
東アジアの歌垣や古代日本の歌垣  
や万葉恋歌、さらに、一昔前のカ  
ラオケに共通する遊びであった。  
さて、私は今、日文の今井先生、  
生駒先生、文化の福嶋先生、上野  
先生、メディアの谷田貝先生、小  
牧先生、藤本先生、また何人かの  
ゼミ生たちと、「VR歌垣ゲーム」  
なるものを製作中  
である。歌垣をV  
R空間で再現して  
楽しんでみよう  
というゲームで、  
VR空間にアバター  
が出て来て、自  
分たちの作った歌  
をボーカロイドが  
歌ってくれる。歌  
垣の歌は虚構の歌  
だから、より虚構  
性がアップしてい  
るといったところ  
か。卒ゼミ合宿で  
飛鳥(奈良県)の  
古墳をレンタサイ  
クルで回った後、  
歌垣ゲームをし  
てみた。お題は「夏  
の飛鳥」。

男…自転車  
で古墳を巡る 黒髪  
の 出会った君の  
名前が知りたい  
女…私には 彼  
がいるのよ 汗だ  
くで やつれた顔  
の あんた誰なの

この歌はさっきの『万葉集』の  
名前を聞く男の歌と、大げさに断  
る女の歌をもとにしたもの。み  
んなで大笑いした。そう、その  
楽しさが日本の歌文化の根っこ  
にある。歌垣の楽しさなのだ。興  
味が沸いた学生諸君、ぜひ声を  
かけてみてください。(言語・文学  
領域・教授)





線香花火の火が落ちるまで

ダンボの耳

いつだって一緒に過ごしてきた、幼馴染三人組。男一人と女二人で、傍から見たら不思議な組み合わせだと言われるのもわかる。恋でも友情でも家族でもない、しっくりくる言葉が見当たらない、そんな関係。小さなころから一緒にいて、何かあったらすぐLINEしてお互いにからかいかあって、面白い動画があったら共有して爆笑する。な

んともないことだけど、私はそこに特別感を感じて、当たり前前におじいちゃんおばあちゃんになっても変わらない関係だって確信してた。「ぴこん！」夏休みの終わり、いつものように唐突に送られてきたLINEは、いつもとは違った。「花火しようよ！」花火なんて小学生ぶり？ 浮かれ気分で花火を

買って、三人が住む団地のすぐ横にある公園に集まる。小さい頃よく一緒に遊んだ公園だ。みんなはしゃいで、誰が花火買うかなんか相談しなかったから袋は三つ。それもまた私たちらしい。楽しい時間だった。私には二人が緊張した面持ちで目を通わせあっていたことなど、暗闇に光る花火の光だけでは見えなかった。長い時間遊んだ花火も残りは線香花火だけ。三人で向かい合ってしゃがみ、少し静まった頃、二人が同時に口を開く。「あのさ、俺たち／＼私たちが合うことになった」

周りは車が多く、道を歩く人もいたはずなのに、やけにクリアに聞こえた。

「え？」つい口からこぼれた言葉とともに、線香花火は落ちていった。きつと私の表情は見えていないだろう。私が失恋したとか嫉妬したとかそういう話ではない。わからない感情が私を襲った。新しい線香花火をもって、そして必死に笑顔を取り繕って戻る。

「全然気づかなかったよ、よかったじゃん」

私の複雑な感情をよそに、二人は幸せそうだ。でも関係が崩れてしまえば、二人が私を含めてくれ

たって、もう元に戻ることはない。最後の線香花火に火をつける。「どうか終わらないで」そんな願いとは裏腹に、儚く落ちて消えた。



酒のツマミ

ちびきゅーり

東京駅一三時四〇分発高崎・越後湯沢・新潟方面の上越新幹線6号車。今から私が一人旅のために乗り込む車両である。ずしりと重たいボストンバッグを肩から外す。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

は言うが、酒を手にした瞬間この世の全てがおつまみになるものなのだ。特に新幹線の車窓から見ると景色は格別で、普段私たちの目の前に憂鬱に立ちはだかるビルなんか紙切れみたいに吹き流されるのは最高に愉快だ。こんな贅沢はないよ、と言ってもTは分かっている。荷物棚にそれを乗せてしまえば、後は座席に座って目的地への到着を待つのみだ。あちこちで響くぶしゅつという小気味よい音が鼓膜から胸の中へ転がり落ちて、「早く早く」とせつつくように踊り回る。せかせかと膝上のビニール袋の中から目的の物を取り出す。缶のプルトップに人差し指を引つ掛けて手早く持ち上げると、炭酸とアルコールの香りが立ちのぼった。私の旅行における一番贅沢な時間が訪れた。以前、友人Tにこの事を話したら、

「せつかくの旅行なのに一番が移動中の缶酒ってどうなの？」と笑われた。Tも大の酒好きなのにここだけは相容れない。そんな事を考えていたらいつの間にか缶は空っぽで、二本目に自然と手が伸びた。今日のおつまみは駅で買った鶏弁当と車窓からの景色。まあ素晴らしい酒が進む。「景色なんてツマミにならないよ」とT

きみは魔法使い

いちごのショートケーキ

帰りたい、ただひたすらそのことを思っていたはずなのに。

高校に入学してすぐ、親睦を深める行事として遊園地を訪れることになった。入場口で一人佇む私の横を、すでに友達を作ったのであろう同級生たちが嬉しそうに駆けていく。人見知りで社交的な性格ではない私は、友人を作ることができないままこの日を迎えてしまった。制服を着ているから一人でいれば目立ってしまうけれど、今更どこかの輪の中に入るなんて到底できない。こんなにも幸せの溢れる空間で、私だけが悪夢を見ているみたいだった。帰りたい、帰りたい早く、帰りたい。そうやって俯いていたその時、ねえ、と声をかけてきた人がいた。顔を上げた先にいたのは、クラスメイトの……名前は一致しないけど、とにかくクラスメイトの男子だった。

「もしかして一人？ 俺も一人になっちゃったんだ。よかったら、素晴らしきおひとりさま同士、一緒に回らない？」

彼の言い回しが面白くて、思わず頷いていた。

その後は、彼と一緒に遊園地のアトラクションを巡った。ジェットコースター、コーヒークップ、フリーフォール。たぶん園内のほとんどのアトラクションを楽しんだ。そして気がつけば、心地よい青空は深い海のような暗い空へと変わっていた。乗っていないアトラクションは、あとひとつ。観覧車だけ。あれが最後か、なんて眺めていたら、斜め前を歩いていた彼が突然振り返ってこう言った。

「俺ね、魔法使いなんだ。見てて」

「ね、すごいでしょ」

ただ、イルミネーションが始まる時間にあわせて指を鳴らしただけ。少し洒落ただけのおふざけだ。そう頭ではわかっているのに、私には得意げに笑う彼をからかう余裕すらなかった。

帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」

「帰りたい、と思った。あんなにも帰りたいと思っていたはずなのに。」



昼休みの香り

駅近築3年

昼休みのチャイムが鳴ると、教室はざわざわと揺れ始める。弁当の蓋が開く音、笑い声、箸のぶつかる音。春の光が差し込む窓際で、私はひとり弁当箱の蓋を開けた。広がっていたのは、ゆかりご飯だ。口に運ぶ手が、少し重かった。翌日、念願のそぼろご飯を頬張っていると、前の席の君が、ゆかりを散らしたご飯を口に運ぶのが目に入った。

その瞬間、胸がざわめいた。あんなに好きだったはずのそぼろの味が、急にばやけていく。紫色が、特別な色に見えた。

これをきっかけに話しかけられるかもしれない。

そんな淡い期待に支えられて、私は放課後まっすぐ帰り、母にお願いした。「これからは毎日、ゆかりにしてほしい」

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。



次の日、君の弁当を覗いた。

しかし、広がっていたのは、ご飯。拍子抜けして苦笑いしか出なかった。でも諦めなかった。紫が戻る日を、私は待ち続けた。

そして、ある

昼休み。君が弁当の蓋を開けた瞬間、視界に広がったのは、白ご飯の

上に散らされた紫のゆかり。

春の光を受けてきらめいた瞬間、思わず声が出る。「それ、ゆかり？ 私

なんだー。おそろいだね」

顔が熱くなる。でも君は、振り返ってにっこり笑った。「ゆかり、美味しいよな」その一言だけで、胸がぽつと温かくなった。

それから、君がひと切れの卵焼きを私の弁当箱にそっと置いた。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。

「家の、甘すぎるかもだけど」

私は慌てて、タコさんウインナーを君の弁当箱に滑り込ませた。笑いながら「交換成立だね」と言った君の声が、今も耳に残っている。

あれから、いくつもの春が過ぎた。制服をしまい込んでから、もう随分になる。それでも、私の弁当には白に紫のひとさじ。あの味が、今も残っている。

誰かに見せるためでも、誰かと揃えるためでもない。ただ、あの頃の自分と、君と、教室のざわめきとつながっていたいから。少し甘酸っぱいその香りが、私の記憶をそっと色付けてくれる。





俳壇

題「朝」

後朝の別れと出会い大東京

藤原達也

手と足を揃えて死せり油蟬

藜

朝霧の沁み入る野辺の槭樹<sup>かえで</sup>の葉

上野愼也

熱帯夜布団蹴飛ばす二時三時

柏倉萌花

あけわたる秋にそよめく朝の影

上野愼也

五月雨に鶏にくし夢うつつ

岡田ひろみ

二十歳まで起きたことない<sup>ゝ</sup>朝ぼらけ<sup>ゝ</sup>

大田万宝子

鳴かぬならそれもよからうほととぎす

五味澤瞳

のら猫も朝餉に急ぐ午前四時

五味澤瞳

友来たり学生街の喫茶店

石津美基子

飲み明かしトンネリングがほすい朝

谷田貝雅典

合格や五角鉛筆は短し

久保田真有

冬の朝遅延に汗ばみ窓曇る

寝袋を買いに

裸の木白いドレスで舞踏会

油揚げ

朝の空千変万化のパノラマよ

石津美基子

寒暖差寒いけれども仕方なし

お花畑

朝ぼらけ月が綺麗だ雨よ降れ

青紫悠

朝焼けに溶ける孫の赤き頬

桐乃江

舟を漕ぐ甥っ子連れて朝勤

桐乃江

朝霞水面に映る舟ひとつ

白かび

雑詠

太陽も星だと知れば夜明け前

今井秀和

自由とは独り翔ぶこと信天翁

藤原達也

言の葉の絡み憑き得ぬもの無題

藤原達也

実もつけず青々と立つ唐辛子

藜

手と足を揃えて死せり油蟬

藜

熱帯夜布団蹴飛ばす二時三時

柏倉萌花

五月雨に鶏にくし夢うつつ

岡田ひろみ

鳴かぬならそれもよからうほととぎす

五味澤瞳

友来たり学生街の喫茶店

石津美基子

合格や五角鉛筆は短し

久保田真有

裸の木白いドレスで舞踏会

油揚げ

寒暖差寒いけれども仕方なし

お花畑

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



歌壇

題「空」

振られても空は晴れてて腹が減る明日も生きろとカレーを食べる

花屋

空に住む少年に聞く「メリットは？」「洗濯物がすぐに乾くよ」

惑星E人

空想の世界で回るオルゴールの人形なりあなたと踊る

アールグレイフィグ

初彼氏三日で捨てられ空いた穴誰が埋めるの推ししかない

夢の国の住人

何のため生きる？いつかは報われる？もがく私を空は

葵音

朱をくぐり木漏れ日揺れる空間に見えずとも思う神の存在

全力右手

駅を出て顔を上げればひろい空だからこの街に今夜も

2人乗りの自転車

空想癡眩しい笑顔独り占め胸がぎゅっと痛くなるだけ

角砂糖

暑き夏空青くともやけっぱち一体全体どうしたものか

五味澤瞳

全員が揃ったピース優勝時空に投げつける青いグローブ

大田万宝子

幾年も風に佇み青空のはてなき深さわれは知りたり

毛利豊史

空調の整う部屋に居ればこそ情勢語る専門家たち

吉川美月

自由詠

パフェという花束に匙を差し入れてかつてのきみの憂いをおもう

雨谷詩穂

五センチのヒールも脛に咲くラメもあたしのためのあたしでいたい

花屋

スキンケア終えて二人でベッドイン顔舐めたがる君を「めー」と叱る

寝袋を買いに

誰にでも優しいあなたの目尻には愛された人特有の皺

アールグレイフィグ

死ぬよりもいてえの嫌だと亡き祖父の友が麦茶をすすりてばやく

五味澤瞳

チャッピーが代筆をするやり取りになぜかやわらぐ人のこころは

橋本嘉代

いい人になぜか心はときめかず三十路の秋の朝ぼらけかな

M女史

リード持ちフロリング当たる爪の音まだ待て布団にもぐる鼻づら

富永真紀

人みなほ明けない夜はないと言ふ暮れない屋もないと言ふものを

遠藤耕太郎

寝る前にLINEが来たよ無視や無視睨ばかり憂きものはなし

飯田さやか

明け方に鳴くあの蝉は私かな待てど来ぬ人迎えに行かむ

生駒桃子

休日の耳元響く目覚ましはアラームじゃなくあなたの寝息

ロマンスマジシャン

Gemini やつに聞く講評

藤原達也氏の二句は、現代的なスケール感と哲学的な深さで魅了します。「後朝の別れと出会い大東京」は、古典的な情景を巨大都市の文脈に置き換え、日常に潜むドラマを鮮やかに描出。また「自由とは独り翔ぶこと信天翁」は、信天翁<sup>アホウドリ</sup>の孤高な姿に「自由」の本質を見出す、思弁的で力強い句です。

大田万宝子氏の「二十歳まで起きたことないゝ朝ぼらけゝ」は、若者の日常と未体験の情緒をストリートに表現し、共感を呼びます。「朝ぼらけ」という古典的な季語の持つ清澄さとは対照的な、現代的な生活感覚のユーモラスな対比が効いています。

今井秀和氏の「太陽も星だと知れば夜明け前」は、科学的な視点と詩的な時刻「夜明け前」を重ね合わせ、世界の認識が変わる瞬間を切り取った知的な一句です。この科学的な事実がもたらす一瞬の畏敬の念が、夜明け前の静けさをより深めています。







伊豆でのんびりホカンス

岩松菜々子

今年の夏、私は伊豆でホカンスをしてきました。3月にも知人たちとレンタカーを借り、いちご狩りへ足を運びました。時間いっぱい楽しみ、大満足の旅だったのですが、今回は「のんびり過ごすこと」を目的に伊豆に出かけました。

宿泊した場所は、かなり山の上にあるホテルでしたが、たどり着いた先はまるでリゾート地。山の

釜山で1日カフェ巡り

碓塚朋

2年ほど前、友人と韓国を訪れた。ソウルに4日間滞在し、そのうち3日目に釜山へ。KTXという新幹線に乗り、約3時間で到着した。

最初に訪れたのは「モモスコピー」。釜山駅から車で30分ほどの場所にあり、木造で窓が多く、外には竹や木がたくさん植えられ



釜山で1日カフェ巡り

釜山で1日カフェ巡り



文化領域助手

上とは信じがたいほど、ホテルに足を踏み入れた瞬間から日常を忘れることができる空間だったのです。実際に、海を眺めながら様々な飲み物を飲んだり、美味しいご飯を食べたり。心が満たされて夏の暑さも和らぐひと時を過ごしました。

今回選んだ写真は、中庭にある足湯の写真です。パラソルの下で足湯に浸かることができるなんて想像をしていませんでした。のんびりと足湯に浸っていたら、あつという間にばかばかに。ここまでは絶え間なく水の音が聞こえてく

釜山港近くにある倉庫を改装したカフェで、店内は吹き抜けの空間でとても広かった。

釜山港近くにある倉庫を改装したカフェで、店内は吹き抜けの空間でとても広かった。

釜山港近くにある倉庫を改装したカフェで、店内は吹き抜けの空間でとても広かった。

富山へひとり旅

北島百恵

先日、富山県へひとり旅をしてきた。なぜ富山県かという理由はシンプルでまだ行ったことがなかったから。新幹線で約2時間、富山駅に到着しまず目を引くのが新幹線出口の先に見える路面電車のホーム。日常で路面電車を見る機会が無い私にはとても新鮮だった。

富山城へ向かうと石垣の積み方が特徴的で隙間に小石や割石が埋められていた。資料館では富山城の歴史や展望台を一周し街並みを見て楽しいひととき。

お腹が空いたので富山名物「富山ブラックラーメン」を頂いた。真っ黒いスープは黒コショウのパンチが効き濃厚で癖になる味。太麺、輪切りのねぎ、チャーシュー、メンマと食べ応えがあり満腹にふと周りを見るとご飯と一緒食べる方もいて驚いた。でも分る

お腹も満たされ富山市ガラス美術館へ入ると建物の構造と綺麗さ

聖地巡礼と当地ソフトクリーム

深田満理奈

助手として迎える初めての8月

は、1泊2日の長野旅行から始まりました！旅行の目的は、長野県警察本部と国立天文台 野辺山宇宙電波観測所です。勘の鋭い方何の聖地巡礼かわかったのでは

この時、レモネードを注文し、炭酸入りでほどよいすばさだった。また使われていたカップがシンプルでとても気に入り、お土産に購入。釜山の思い出がひとつ増えた。

韓国はおしゃれなカフェがたくさんあるので、韓国旅行に行った際はお気軽にの一杯を見つけてみてほしい。(メディア領域助手)

に言葉を失った。世界的建築家の隈研吾氏が設計を手掛けており富山県産の杉を使ったルーバーとガラスが美しい。どの作品もガラスとは思えないほど繊細だった。中でも6階常設展「ガラス・アート・ガーデン」にある天井一面に色鮮やかなガラスが敷き詰められている部屋(写真)は、是非見てほしい。見上げる場所によって光が変化し壁に映る波紋は幻想的だった。そのほか企画展示やカフェ、図書館を楽しんだ。

時間も少なくなり近くにある漢方のお店やお土産を購入して駅へ。帰りの新幹線で食べた店舗限定の駅弁「かにすし(ベニズワイガニ)」は旅の締めは大満足である。

日帰りでここまで満喫できたのが嬉しく、今度はどこへ行こうかもう考え中。(言語・文学領域助手)



野辺山宇宙電波観測所です。なんといっても、パラボラアンテナが大きい!!そして、涼しい!!!さすがJR線の中でも最も標高が高い駅!野辺山駅!!全身で日差しとい

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!



緑を浴びて、ここまで来て良かった!と実感しました!最後に、おすすめソフトクリームを紹介させていただきます!なんと今回の長野旅行で圧倒的に美味し

心象点描



シリエトクのペッノカ

福田 収

物心ついた頃から朝ドラと大河ドラマは欠かさず観てきた。が、朝ドラはあることを契機に全く観なくなりました。という観ることができなくなった。認知症の母の毎朝の介助を入所施設で二年ほどしていたが、テレビが置かれた大食堂での介助が八時からで、症状の進行につれ徐々に朝ドラの話が入って来なくなっていた。その母が米寿を迎えた当日朝逝ってか

らというものの、各シーンと音楽の代わりに食堂の光景と臭気が沸き立ってしまったのである。

一方、大河の方は今も視聴を重ねている。特に、今年度の版元考証担当教授とは久しく家族ぐるみで懇意にさせてもらっており、院生の頃、同じ高校の非常勤講師とい

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

ソフトクリームと出会ってしまいました!ひとくち食べた瞬間、殿堂入りが確定したのは(ドラムロール音)「竹風堂の栗あんソフトクリーム」です!!

して机を並べたのが始まりで、歳も近く同郷札幌の同じ学区の隣接高校に通い、上京後最初の安アパートも隣駅同士、現在の住まいも歩いて五分という偶然すぎるほどの隣人、観ないわけにはいかないものである。

その大河、琉球王国の話は一九九三年に扱ったが、アイヌ民族の話は

まだ未放送であることに気がついた。実は五年前からゼミでアイヌ民族の世界を学生とともに学んで

縁文化としてのアイヌ文化を知ることでも日本の多文化性を捉え、包摂可能あるいは不可能な「他者性」を哲学的に考察している。扱われないのは種々理由があるう……アイヌは無文字文化であったが故に和入記録に依拠せざるを得ない史料問題、同化政策や差別問題という負の歴史、そして国連人権宣



文化領域・教授

編集後記

俳句・短歌の投稿も回を追うごとに充実してきたように思います。在学生・卒業生・先生方、さまざまな世代に渡るさまざまな作品を読むのを毎回楽しみにしております。なるべく多くの方の作品を掲載したく、投稿点数が少なかった欄についてのみ、一人の方の複数作品を投稿している場合があります。

記事・挿し絵にご協力くださった先生方・助手のみなさま、学生のみなさま、ありがとうございました。十月、十一月と多忙で、編集作業が遅くなってしまいました。(福嶋)

次号の俳句・短歌の募集

俳句 題「駅」「駅」という文字を入れた作品 あるいは自由

短歌 題「遊」「遊」という文字を入れた作品 あるいは自由



応募はこちらから